

# 浪江の



# こころ通信

・第19号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第19号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243-22-4218





## 富川 牧江さん(川添)

取材者：きょうとNPOセンター 田口  
取材日：11月30日

### 浪江町中央公民館の高齢者学級の皆さんに届けたいメッセージ

富川さんは、昨年3月11日以降連絡をとることが難しくなった高齢者学級の皆さんと再会できる日が来ることを願い、京都での生活を続けて来られています。

1人で避難して来た京都での生活も、その後、大阪に住んでいた娘と同居をし、1年8カ月が過ぎました。主人は松江市に単身赴任中で、大学4年生の息子は来春から奈良県の高校教師として働くことになり、時間の流れを感じています。

浪江町を離れてからはより一層、家族や親戚、友人・知人と連絡をとり合い、交わし合う言葉が心の支えとなっています。日常の他愛もないコミュニケーションや情報交換を通じた「つながり」のありがたさを感じる日々です。震災以降これまでのように気軽に会えない友人同士の近況を伝え合う通信をつくって、絆をより深めています。

震災前は、浪江町の臨時職員として、公民館の高齢者学級に関わるお仕事をしていました。あの日：3月11日も、午前中に各学級の代表者会議があり、1

年間の取組みを振り返りながら、次年度に向けた学習内容に関する打ち合わせを終えたところでした。今、毎日のように思い出すのは、5つの学級(浪江松寿学級、

幾世橋長寿学級、請戸くろしお学級、大堀寿学級、苅野しゃくなげ学級)でお世話になった皆さんの顔です。この通信の場を借りて、高齢者学級の皆さんにメッセージを伝えさせていただきます。

皆さん、いかがお過ごしですか？学級では未熟な私を助けていただき、いろいろな活動を通してたくさんのお話を学ばせていただきました。たった1年間だけでしたが、私にとって大切な宝物です。どうか、必ず、お会いできる日までどうぞお元気でいらしてください。

私はここにいて自分にできることを...と思い、本に携わることが好きだったこともあり、最近、地域の図書館で図書ボランティアを始めました。

これから先のことはまだわかりませんが、いつかはきっと浪江町に帰れると信じて、私にできる小さな発信を積み重ね、つながり続けられる関係を大切に育てていきたいと思っています。



▲左から、長女の麻里奈さん、牧江さん



## 佐藤 光衛さん(苅宿)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：12月3日

### 千年に一度の体験だからこそ、心温まる話は後世まで伝えておきたい

佐藤さんは震災前、苅宿で区長をされていました。以前苅宿は農家がほとんどでしたが、新興住宅ができて新しい方々が住みはじめ、半々くらいになったそうです。その新しい住民に地域になじんでもらえるようお祭りやイベントを通じて交流を深め、地区の活動に加わるように地区の人たちと心を砕きながら、山や川に寄り添うように暮らしてきました。苅宿の農家の仕事や景観を守るために、農水省の補助金事業にも携わってこられました。

現在は、福島市で妻のトキ子さんとともに、3人の幼いお孫さんの面倒をみながら、娘さん夫婦と一緒に暮らしていらっしゃいます。



▲左から、佐藤トキ子さん、光衛さん、そして長岡眞さん。長岡さんは現在の区長さんです。取材の折り、佐藤さん宅でお会いしました。苅宿の新旧の区長さんが福島で変わらぬ交流を図っておられる様子を、地域の強い縁を感じました。

あの日は、不気味な光景や音を聞きました。地震発生ときは、13日に地区の総会会場となる公民館や地区内で灯油の配達をしていました。道路脇の水路が左右に大きく揺れて水がこぼれ、電柱がしなり、あちこちの家の瓦が落ちるのを見ました。急いで自宅に戻ると、妻が近所のお友だちと庭石につかまっていた。家は傾いたように揺れ、瓦もガラガラと落ちる中空を見上げると、見る間に真っ暗になって雨が降り出し、雷のような地響きが3回ありました。

津波のことは思いもしなかったのですが、室原川に架かる橋は地震によって大きな段差ができ、サンブラザの橋を通ってようやくまちなかに入りましたが、とても酷い光景でした。再び帰宅し、総会の延期を班長さん方に知らせつつ、自主防災の会や消防の発電機を苅野小学校に運んで暖を取りました。日付が変わるころ、請戸の人たちが着の身着のまままで校庭に車で避難して来ましたが、津波の被害を話すのですが、誰も直ぐには信じられませんでした。

翌日、ヨークベニマルからカットブレードルやカセットコンロの差し入れがあり、私は家から玄米を運び、小高の精米所の行列に並びました。順番が来て精米をしていたときに、水蒸気爆発の音を聞きました。米を公民館に届ける前に避難指示が出て、津島へ向かいましたが、すでに津島の避難所は満杯だったため、川俣町南小学校を経て川俣高校に行きました。10人近い人たちがおり、持ってきた毛布だけで一晩を過ごしました。その後、福島市第三中学校に1週間、妻の姉が住む茨城の竜ヶ崎に約40

日世話になりましたが、その後娘の家で暮らしています。

■つらい避難のさなかに、ありがたい心配りがありました。群馬県桐生市に花ぶさ弁当という会社があり、社長さんは苅宿出身です。苅宿は農家が多く、私もその会社に米を納めていました。あのつらい避難のさなか、東和に点在していたほとんどの避難所に弁当を届けてくださいました。カレーライスの炊き出しもされたと聞いています。社長さんにお会いできなかったのですが、なかなかできることではありません。あのころ、ほとんどの人たちがガソリンや食べ物がなく、寒さに震えていました。また東和針道の服部新聞店さんは避難所の人たちにお風呂の提供をしてくださったとのこと。本当にありがたかったです。決して忘れず、多くの浪江の人たちに伝えたいと思っています。

避難が続きますが、気持ちの持ちようだと思います。昔の良さを忘れずに、みんな力を合わせて私たちの苅宿を取り戻したいと願っています。



## 森川マツ子さん(加倉)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：12月3日

### 浪江町、福島県のつながりを大事にしたい



ご主人とお義母さんの3人で暮らす森川さんの楽しみは、ペランダでの花や野菜の栽培です。

震災直後、原町(南相馬市)の長男の家に避難、数日間いた後、私の実家の飯館村に避難したのですが、私たちには子ども同然の犬がいるために、一度もふとんに手足を伸ばして、ゆっくり寝ることもできませんでした。その上、飯館村も線量が高いことがわかり、再避難をしなければならなくなりました。状況を見かねて、松戸市に住む次男が「来たらいよいよ。」と言ってくれました。私たち夫婦は次男の家に、義母は義妹の家に世話になることになりました。

今の家には、今年の5月に越してきました。私は、腰痛で震災の前後に2度の手術を受け、リハビリのための通院が必要でした。駅から歩いて5分、商店街の中にあるマンションで、通院にも買い物にも便利ですが、やっぱり浪江での暮らしが恋しいですね。浪江にいたころは、私も夫も会社勤めをしていました。仕事の傍ら、夫は狩猟やキノコ採りを楽しみ、私は、野菜や花づくりを楽しむ日々でした。今も、マンションのペランダで、鉢植えの花を育てています。花芽がつくとうれいすね。浪江に住んでいたころは、友だちにあげ、喜ばれていました。こちらに越してきてから気軽にあげる友だちもいないので、少し寂しい思いもしています。

浪江にいたときには、自分の身の周りのことは一人でできた義母ですが、数カ月間の避難生活の中で、体調を崩し、ほとんど寝たきりの状態になってしまいました。アルツハイマーの診断を受け今年8月に入院し11月に退院、今は私たちと一緒に暮らしています。入院している間に病状は改善、週に3日デイサービスに通っています。編み物が好きで、デイサービスに行くときにも、毛糸と編み棒を持って

行きます。夫は、60歳を過ぎた今も、震災前の仕事の経験を活かして近くの病院で働いていますが、仕事から帰ると、義母の話し相手をしてくれ、ほんとうに助かっています。

震災後に6回、浪江に一時帰宅しました。6回目の帰宅のときには、自宅の周辺は草ぼうぼう、木々が道路をふさいでいました。帰りたい思いは強いですが、荒れ果てた家を見ると、帰れる日が来るのだろうかと不安になります。そんなときには、浪江の友だちと励まし合います。いわき市に避難している友だちは、泊りがけで遊びに来たりもしてくれれます。本音で話ができるのは、やっぱり浪江の友だちです。

11月下旬には、被災者支援を行っている松戸市の団体主催の「松戸の史跡めぐり」に参加しました。義母がいるので、遠出はできませんが、被災者を対象にした催し物には、できるだけ出かけるようにしています。米やお酒や果物など、福島県産の物を取り寄せることもしています。浪江町、福島県につながりをこれからも大事にしていきたいと思っています。



## 高野 康幸さん(請戸)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田  
取材日：12月5日

### 『人との絆』の大切さが身にしみた震災

高野さんご家族は、地震後、町役場、津島、二本松市などの避難所を点々とした後、娘さんたちが小さいころから家族で毎年のように訪れていたさくらんぼ農家の方を頼り、長女・博美さん家族、次女・瑞希さん家族と一緒に山形県中山町に避難しました。昨年9月から町内の借り上げ住宅に家族3人で暮らしています。

地震が起きたのは、早朝の漁りが終わりで家であまり休んでいて、こんな大きな揺れは初めてでいつ終わるのかと思うほど長く、2回目の揺れで隣の家屋が目の前で一気に倒れ、とても大きな地震だと感じました。すぐに支度し船の様子を見に行くと、いつもあるはずの船が港に一艘も見えず、岸壁に行くと、すべての船が港の海底についている状態でした。こんなに水が引いているのは異常だと思いきや家に引き返し、妻と母を乗せ家から逃げました。私たちが逃げた後、娘が心配し請戸に見に行きましたが、玄関で警察の方から津波が来るからすぐに逃げろといわれ、家に入らず逃げたそうです。助かって本当によかった。夕方になり、避難した役場から見た請戸はまるで湖のようになっていて見たときは本当にショックでした。孫たちは津波が押し寄せるところを小学校で見ているため、心の傷が大きかったのではと心配です。

私の船『第1吉祥丸』は昨年海から1km離れた道路で見つかりました。地震が起きたのは、早朝の漁りが終わりで家であまり休んでいて、こんな大きな揺れは初めてでいつ終わるのかと思うほど長く、2回目の揺れで隣の家屋が目の前で一気に倒れ、とても大きな地震だと感じました。すぐに支度し船の様子を見に行くと、いつもあるはずの船が港に一艘も見えず、岸壁に行くと、すべての船が港の海底についているのは異常だと思いきや家に引き返し、妻と母を乗せ家から逃げました。私たちが逃げた後、娘が心配し請戸に見に行きましたが、玄関で警察の方から津波が来るからすぐに逃げろといわれ、家に入らず逃げたそうです。助かって本当によかった。夕方になり、避難した役場から見た請戸はまるで湖のようになっていて見たときは本当にショックでした。孫たちは津波が押し寄せるところを小学校で見ているため、心の傷が大きかったのではと心配です。

山形に避難することを決めたのは、町を出てから4日目の朝でした。お世話になっていた山形県寒河江市のさくらんぼ農家の方から電話をいただいて、山形県に行くことを決めました。その方は、私たちの安否が心配でさまざまなつながりを調べ連絡してくださったそうです。避難所を自分の家のように使わせてもらい、役場の方が朝夕の様子を見に必ず寄ってくれたり、畑を貸してくださったり、よくしてくださり勇気づけられました。会ったときに涙を流し喜んでくれた方もおり、今回の震災では、



▲ご家族そろって。  
左から高野タキ子さん、サダ子さん、康幸さん



## 横山 眞志さん(立野)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島  
取材日：12月10日

### 被災者なりの意思を持って、 子どもたちの未来のためにできることを



▲借り上げ住宅の庭には、偶然、浪江産の石があったそうです。「これも心の支えになっています」と、横山眞志さん。

仙台市の借り上げ住宅で奥さま、お母さまと3人暮らし。息子さん一家も近くに移転し、ご自身も仙台市若林区役所で職を得ました。故郷を奪われた悔しさや怒りを乗り越え、「今は前を向いて歩きだしています」。

**■忘れられない浪江の思い出**  
私はJAを退職するまでの3年間、食農教育を担当していました。管内の小学生の息子さんに稲作や大豆栽培を体験してもらって、自分たちが育てたお米でおにぎりを作って食べたり、大豆で豆腐や味噌を作ったり。命あるものが口に入るまでのプロセスを実感していただくことで、農業や環境、地域とのつながりを意識してもらうことが、そもそも趣旨でした。満面の笑顔でおにぎりを頬張っていた子どもたちの今を思うと残念でなりません。

**■原発事故後、仙台へ**  
私たちが震災後、着の身のまま南相馬市の家内の実家

に避難しました。が、そこも原発から20km圏内で避難命令が出されたので、家内と母と私の3人は飯館村を経由し、次女の嫁ぎ先の仙台に。息子夫婦と孫の4人は静岡県にある嫁の実家にいったん身を寄せました。国から何の情報も知らされず、放射線の危険にさらされて右往左往し、まさに棄民だと思いました。とはいえ、仙台市に移ってからは嬉しいことも多々ありました。まず、浪江町を知っているという借り上げ住宅の大家さんから大変親切にいただいたこと。県の委託を受けた職業訓練校でIT基礎クラスを受講でき、すばらしい仲間と出会えたこと。またそこでMOS資格を取ることができ、臨時に雇ってくれた若林区役所からは再雇用のお誘いをいただいております。ありがたいことです。

**■未来のためにできることを**  
家を訪ねてきた菩提寺の和尚さんから、「あなたの先祖は加賀の国、今の石川県から修行の名をかりてお坊さんに連れられ、飢饉で疲弊した福島にたどり着いた。祖先が苦勞して浪江に築いた家を、今度は新たな地に築く運命だったと考えよう」と言

い聞かされました。浪江に戻りたいですかと聞かれたら、戻りたくないわけがありません。しかし一時帰宅した折に放射線量を測ると、場所によっては現在も空間線量が20マイクロシーベルト以上あり、しかも家を取り巻く山林は国の除染計画の範囲外です。山から引いている水など内部被ばくの危険を考えると、将来的にも帰還は無理と考えざるを得ません。ところが行政の区分では、うち周辺は、将来的に帰還可能な地域」とみなされています。国や県に見捨てられた今、浪江町だけが私たちを守ってくれ最後の砦と信じています。またわれわれは被害者であると同時に、加害者として原発の存在を許してきた責任も負っています。個人でできることは本当に少ないけれど、原発反対のデモに参加したり署名をしたり、子どもや孫たちの未来のためにできるだけのことはしたい。仮設住まいでは内向きになりがちですが、自分から外に一歩踏み出し、被災者なりの意思を示すことも大切だと思っています。



## 神内侘子さん(川添)・岡田博子さん(幾世橋)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内  
取材日：12月6日

### 「ここまで頑張ってきたんだから」



▲左から神内さんと岡田さん

神内さんは、現在ひとり住まい。息子さんが南相馬と埼玉を行き来しています。

岡田さんは、娘の有加さん、孫の珠奈さんとの3人暮らしです。

**■神内さん**  
震災の日、父の命日で午前中は、お墓参りに行きました。午後、お嫁さんは孫の元太と優花を連れ3人で海の方にドライブに行っていました。後でわかったことですが、ドライブの途中、元太がサンプラザのボールプールに行きたいと言い出し、そこで遊んでいたために津波に遭わずに済みましたが、地震に驚き外に飛び出して農業用ため池のガードレールに掴まっていました。

そのうち地面が割れてきたのを見て家の隣の空き地に逃げ、座り込んだまましばらく動けませんでした。親子3人が戻って来た姿を見たときは本当に嬉しかったです。もし海の方にそのままドライブしていたらと思うと震えが止まりませんでした。「だるまスタンプ」を貯めてみんなと行った旅行が良い思い出です。まだ、台紙に貼ったものが残っていますが、捨てずに記念に取っております。

を探しに戻り、うずくまっていた猫を見つけたときはとても嬉しかったです。私は、今住んでいる所にやっとなれ愛着が出てきました。悪く悪く考えると、からだに良くないので考えないようにしています。願いはただ一つ、これからずっと住み続けることができる自分の家が欲しいです。

**■岡田さん**  
私と娘の有加と孫の珠奈は友人家族と一緒に荻野、川俣を経て、友人の親戚が住んでいる新潟に避難しました。そして翌日、埼玉にいる次女のアパートに移り、その後、孫の学校の近くである現在の住まいに引っ越してきました。今、気がかりなのは、珠奈のことです。環境の変化や親のストレスも影響があるのでしよう、ときどきふとつぶやく言葉に子どもながら、いろいろと考えているのかと感ずることがあります。

浪江が封鎖される2日前に猫

**■神内さん・岡田さんから**  
皆さん、ここまで頑張ったんだから、自分のからだに気を付けてみましょう。どんなイベントや集まりにも行ってみたいですよ。私たちも埼玉の「さいがい・つながりカフェ」で出会い、今ではとても仲良しです。毎月2回ですが、みんなに会うのが楽しみです。先のことを考えるとつらいですが、なんでもやってみようと思っています。住んでいる場所は違いますが、浪江の人たちの繋がりが支えです。皆さん今後ともよろしくお願ひします。

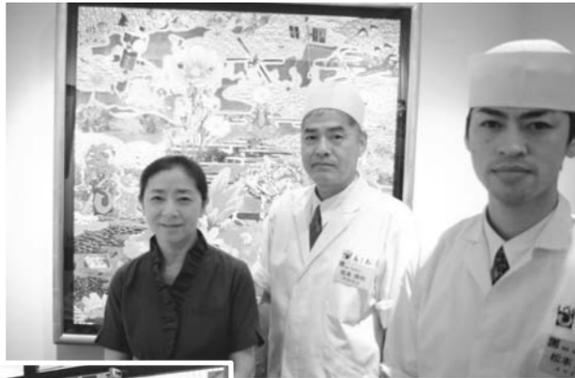


## 松本 清治さん・茂子さん(小野田)

取材者：茨城NPOセンター・ commons 小原  
取材日：12月3日

### 「鮮度に自信、味にまごころ」寿し松開業

浪江町で町民に愛されるお寿司屋さん「寿し松」を運営されていた松本さんご夫妻。11月、息子さんとともに茨城県つくば市で新店舗「二代目 寿し松」を開業されました。



▲松本さんご夫妻と、息子で二代目の武士さん。07年リニューアルオープンの際に画家の鴻崎さんにいただいた「寿し松」の絵を背に。



◀二代目 寿し松

息子が生まれた1984年から浪江で「寿し松」をやっていました。97年には富岡店がオープン。2007年には浪江店のリニューアルオープン。いつも常連さんに来ていただいています。あの日は、近くのいくつかの中学校が卒業式だったため出前の注文が殺到していました。それが一段落して仮眠を取ろうと

していたところに、揺れはじめて立ってられないような状況で、足の踏み場もなくなっていました。次の日に防災無線が入り津島に避難しようとしたが、避難所がいっぱいで、入ったら出られないと思いそのまま川俣に抜けました。偶然にもスタンドが空いていて大変渋滞していましたが、給油でき助かりました。それから、福島市の体育館での避難を経て、埼玉で暮らし始めましたが、周囲に知り合いもいない生活でした。それでも寿し松の再開への思いは消えずに新天地を探していたところ、人口も増えている新しい街なので受け入れてもらえるかも、というところでつくば市を選びました。1年以上の埼玉での生活を終えて、つくばに越してきたのは今年5月。半年間の準備を経て11月に「二代目 寿し松」を開業したばかりです。浪江店と比べると今の店舗は手狭だし、設備の面でまだまだ不便もありますが、とりあえずはこっちで頑張っていきたいですね。

ただ、震災の前は家族みんな近いところに暮らしていたのにバラバラになってしまったことが悔しいです。以前は週末には何世代もの家族が集まって過ごしたものです。帰れるなら帰りたいという思いは当然ありますし、その思いはみんな一緒だと思います。遠く離れたつくばでの開業となりましたが、繋がりのあった懐かしい方も来店してください。それから、新しい出会いがあるから嬉しいですよ。やり方によってはこっちで店舗を増やすことも可能だと思いますよ。「桜梅桃李」の精神でお客さんの要望に答えていくしかないと思っています。「桜梅桃李」っていうのは、つまり、「さくら・うめ・もも・すもも」。花には変わりないんだけど、それぞれ違う。個性があつて、それぞれ良いところがある。マニュアル通りの接客ではなくて、お客さんに誠実にやっていくことが結果的にお客さんに来ていただけることに繋がると信じています。



## 立川 正恵さん(室原)

取材者：NPO法人 とちぎボランティアネットワーク 徳山  
取材日：12月1日

### 生かされているということを実感しています

浪江町の室原から現在栃木県那須町で避難生活をしている立川正恵さん。震災発生から比較的早い時期に栃木県那須町に避難したそうです。現在小さな街ではありますが、住宅地の一戸建ての住宅で息子さんと生活しています。明るく謙虚で前向きな感じの女性です。



▲少し頼もしくなった息子さんと以前勤めていた職場のカレンダーと。

地震が発生したときは介護の仕事をしていて、榎葉町にある利用者宅訪問のため車の運転をしていました。緊急地震速報で車を停車し地震の揺れが収まった後、訪問した家に戻り避難を促したり、安否を確認したりしました。その後、榎葉町地域包括センターに行き、避難者の受け入れや名簿作りとボランティア活動をjして、その日は家族と合流できませんでした。翌日は原発事故による避難となり、家族や親友の家族と合流

しましたが、さらに避難指示が出た福島市の福島西高校の体育館に避難しました。それでも目に見えない放射能への心配が拭えず、3月19日に栃木県那須町の避難所へ避難しました。私の親は農業をしていたので、避難先でも農作業ができる環境が必要だと思い、畑付きの一戸建ての家を5月から借りることにしました。避難先では地元の人たちに暖かく迎えられる、私自身介護のケアマネジャーの資格を持っていたので、早い時期に仕事に就くことができました。地元の自治会に入り地域の行事にも参加して、今の生活が特殊ではなく普通の生活として過ごすようにしています。残念なのは、80歳の母が急激な生活環境の変化に元気をなくし、浪江に帰りたいという願いも叶わず昨年11月に亡くなりました。私自身恵まれた生活を送っているとありますが、夕暮れ時になると浪江町の方角を振り向いてしまうときがあります。「何をしているのだろう、私」

と思うと、浪江のことが恋しかったり、荒れ果てた家とかいろいろ複雑な思いがよぎってしまうんです。この生活がいつまで続くのか今の時点ではわかりませんが、今は震災発生から今まででいたいたくさんの恩を少しでも返していければという思いと、中学3年生になった息子の成長を楽しみに生きていきたいと思っています。

**お詫びと訂正**  
「浪江のこころ通信第18号」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。  
22頁 渡辺理恵さん  
「6人家族」で仙台にお住まいとご紹介しましたが、義父母さんも一緒に「8人家族」で仙台市にお住まいです。